文化・芸術

〈名画の扉〉

大川美術館常設展示から

「花」

1916年、油彩、カンバスボード
22・7㌢×15・8㌢

中村彝（1887～1924年）

ちょうどはがきの大きさに描かれた小品です。アネモネでしょうか、赤い花が白いポットに生けられています。透明感のある赤、ポットの白、そしてテーブルの上の敷物の緑色が、とても鮮やかにひびきあっています。小さな画面とはいえ、この画家ならではの、色彩の感覚と筆致のさえが感じられる好もしい作品です。

中村彝は、早くからその画才をみとめられながらも、宿痾（しゅくあ）となった肺結核の治療をしながら、制作をつづけました。それだけではなく、新宿中村屋相馬愛蔵、黒光夫妻の長女俊子との恋愛など、煩悶（はんもん）の青春のなかにいました。

この作品を描いた時期は、彝が俊子への思いをつのらせていた時期で、病状が悪化して会いたくても会えず、心身ともに弱っていたときでした。ですから、画家がかれんな花の美しさに、何を見ようとしていたのかと想像するとせつなくなります。

（田中淳）